

# 栃木県における発達障害児者のライフスキル支援に関する研究

事業代表者（宇都宮大学教育学部特別支援教育専攻教授 梅永雄二）

構成員（所属・栃木県立那須特別支援学校副校長 加藤豊）

## 1. 事業の目的・意義

発達障害児者の社会参加における実践的な教育支援を実行するために、医療・教育・福祉・労働等の連携のもとに栃木県の発達障害児者に関わる医師、教師、施設職員、就労支援担当者および保護者対し、理解・啓発活動を行うことを目的とした。

## 2. 事業内容

香川大学教育学部特別支援教育専攻教授の坂井聡氏による知的障害を伴う自閉症児童生徒のコミュニケーション指導について、AAC(代替コミュニケーション)を使った指導の効果について講演を行った。

知的に重く、言葉によるコミュニケーションが取れない自閉症児でも、支援機器によるAT(援助技術)によって効果的なコミュニケーションスキルの獲得成果が示された。

表1はBlackstoneによるAACの必要性について述べられた理由である。

表1 なぜ、今なのか？

<ul style="list-style-type: none"><li>・ AACを使った指導をすることができるスタッフの不足</li><li>・ コミュニケーションよりも身体的、医療的な介入に焦点が当てられることが多い</li><li>・ 音声コミュニケーションのスキルの発達を期待して様子を見るという傾向が長く続く</li><li>・ AACが音声表出の発達の妨げになるかもしれないという懸念があるというような考え方がある</li></ul> <p style="text-align: right;">Blackstone (1991)</p>
---

具体的には、表1に示されるような理由から、音声言語を持たない重度の知的障害を伴う自閉症児者に対し、スマートフォンにおけるアプリケーションを開発し、ボタンをクリックすることによって音声が出てくる

AACを利用した。

表2 視点を変えたコミュニケーション

## 視点を変える

その人はどう考えているのだろうか？

- ・ 技術をもてば見えるかも
- ・ その人が何を苦手としていて、何に困っているのかを考えてみる。
- ・ 障がいにとらわれてないだろうか？
- ・ 私が変わることから
- ・ コミュニケーションとれているのかな？と考えることから

また、表2は障害にとらわれるのではなく、自閉症のコミュニケーションの特性を把握した方法を検討することにより、問題行動の軽減が図られるといった視点である。

## 3. 事業の進捗状況

栃木県の特別支援教育に関する教員だけではなく、通常の小中高校の教員にも発達障害児者の理解が進み、医療や福祉、保護者を含めた連携の在り方などにも着実に進捗していることが参加者の声から反映された。

## 4. 事業の成果

発達障害児者に対する支援の理解・啓発活動は継続して行っているが、教師だけではなく発達障害児者と関わる医療、福祉、労働機関の専門家が増加した。

## 5. 今後の展望

地域における発達障害の理解が進んできており、今後より一層の地域貢献活動を継続してければと考えている。